わが生涯を生きる

0 Inc., 1933) & てい る。 抜粋はエ 7. 第 コールドマンの自伝。Living My Life (New York: Alfred A. Knopf, 如章、 **以章を訳したものである。小見出しはいづれも原本の柱に依**

版は二冊本で、総頁一五○○頁。原稿用紙で約三八○○枚ぐらいになろうか。 サン・トロパーズに落着き一九二六年九月に執筆を終るまでが扱われている。 エマが一八八九年八月☆自伝は一九三一年一 月一五日、ニューヨークに到着した時点から筆を起こし、一月フランスのサン・トロパーズ在で執筆された。何分迭 何分浩瀚な著書で 南仏の漁村 クノッ プ社

カーネギー製鋼所のスト

組合で、 され、労働者を鉄腕で支配していました。 他方、カーネギ 連盟に組織化されている雇人との間にトラブルが起きたのを報じました。連盟は に委ねたことでした。フリックはまたコー カーネギー 組合員の大部分は米国人、決断と気慨があり、自己の権 |一年五月のことだった。ピッツバーグからのニュースは、カーネギー製鋼所と鉄鋼労働者総 が、一時的に全経営を、労務に敵意を持つので知られたヘンリー・ 社は、厳しい雇主として知名な有力会社です。 クス業界では相当な社主でしたが、そこは労働組合が厳禁 特に興味深い 利に眼 覚めた人びとの集まりでした。 クレイ・フリック社長 のは、会長アンドリュ・ 米国最大の有力労働

度それ迄の協定が満期になり、 鋼製品の優勢な市場価格に基づいたスライド制に 、新賃金表を提示しました。 で、比 当時、輸入鋼には高い り、数千名の労働者が雇われ、仕事は長い 類のない繁栄を享受していたのです。その最大工場群 関税をかけ、 労働者は、 米国鋼業界はブー くなっ より、会社と組合の間で協定されます。ところが丁 訓練と高度の技術が要請 た市場価格と工場の生産拡大を理由に、 ムでした。 は、ピッツバ カ ネギー されるのでした。賃金は、 社は実際上の独専業 グ近郊のホー 増額を求 ムステッ

クが状 協定しない、 況の全責任を引受けたのです。彼は今後、スライド制を廃棄すると宣言しました。会社は総連 のアンドリ 会社が賃金を決定すると言うのです。 ユ・カー ネギーは都合よく、スコットランドにある持ち城に引籠った。 事実、 彼は労働組合は少しも認めない フリ "

した。これは宣戦布告です。 ように もない。と言う仕末でした。 ようになりました。 た。それだから人びとは、個別に仕事に応募し、賃金は各労働者ごとに別個にとりき に取 フリックは労働者の組織との平和協定を素気なく断 おうとはしなかったのです。彼は工場を閉鎖 直ち に工場を閉鎖し、ストはい らない、 D して、人員 " わり、一仲裁 クアウトだ。 して貰うこと と宣言

で最 招来するも ックアウトされた労働者の多勢なこと、それが連合労組と関連産業に及ぼす効果か ホーム も保守的 ステッドとその近郊では感情 のだとして、彼を批判しました。 なのでさえ、フリックの介入と徹底し が 高 ぶつて 12 たやり方を非難 0 同 情 L は 労働 た。彼等は、フ 者に集りま 6 1) L みて、 た。 ックの活 T

ひび 雇主との団体交渉権を主張しました。その的に労働者が起ちあがった。鉄鋼労働者は てい 声フ 明 1) 0 " 調クの 挑戦を を受けて立つと公言 しく、 革命 戦争 0 反 逆者精 神が作

した闘争の 可能性に吞みこまれ 7きを熱心に追すの情景から遠 ニュ b たし達はそう考えた 土着の耕人 スの第 10 K ま 跳れた、ウオセス かれた 報を求 が起ちあ てい まし めに出たもの がり、 のです。ニュースに夢中で眠 自己の ター市 です。 足にとって、 力を自覚しはじめ 幾晩も状況 た 米国]労働者 たあら 3 0 、長く 時間も惜しまれ のい ゆる角度か 眼 T つなぎとめ 覚 1 めス た。 あ 6 6 ŋ, れた鉄 朝に 4 待 な ち

スクリ 13 に立寄りま た。 わ た が U とりで店 に 12 た 0 b

ぐりました。その時客がテー た母親に対するフリックの E ンの刑 する フリッ に皿 出さる 連 を置 をつれてくると脅迫しているのです。語 クの遺り口を読みました。彼は要求に屈するぐらいなら、殺した方がまし き、 立籠 非人間性が 新聞 った母親、 ブル の太組みを眼 の所で言うのが聞えました 、わたしの心を燃えあがらせた。 保安官によって街路へかつぎ出さる〉わたしは客 にとめ た。ヘホー ŋ 口の粗野な不愛想さと追い立てを食 ムステッド最 憤激がわたしの全身を駆 新の展開 の肩越 スト組 だ、 した労 0 家族 H 0 E

「病気かね、あんたは?何かしてあげようか」

ました。 を閉めますから」わたしはうっかり口をす 「ええ、その新聞を下さい っかり口をすべらせてしまった。客はな。その代りアイスの代金は払わなく 客はわ T 43 たしが変な女だというよう いの さあ帰って下 3

夜勤のため休 ムステッドなん 「どうしたんだい、エマ?怖い顔をして」わたしは言葉にならず、新聞を手渡した 店を閉 めると街区を三つ、全速で駆けぬけ、ア h でいた仲間達は、わたしが新聞を握って、 です。わたしもいまになって判りました。わ 18 ートへ帰 部屋に駆込んだので起きあ たし達は りました。そこは ホ ームステッドに ロシア がり 42 7 るべきなんだ。 は ま な

いる所なら何処だってかまわない。わたし達は、そこにいるんだと彼が付言しました。 彼の首にかじりつき、彼の名を呼びました。わたしだって行きたいんだ。「今夜行こう 派な 初 が来たんだ!」彼が言うのです。インターナショナリスト に立上って、「ホームステッド ·y セー ジを伝え、 彼等に今がストをする時であるだけで だ!」と叫 びました。「ぼくはホ なんだから、労働者がや な ムステッドに行 何時でも自由な くぞ

テッド 女がいる。だがここ米国では誰がキズムを求めて闘うべきなのを示 かなければならないんだ! いるだろう?そうなんだ、わたし達が、今夜、ホームし、援助しなければならないのです。ロシアには多く ス

て、片附けを済したら鍵を渡す:と作り話をまじえて答えました。 そのため発たねばならず、その代り店は手放すから、その晩の売上げだけは貰いたい、閉店まで店にい狂い沙汰だと言いました。 でもわたし達を説得できず、 動かされません。 そこで親しい肉親が危篤で 11 るのでし 、金もできかかっている、せめて夏の終りまでいたら、干ドルは儲かるんだから、やめるなどは気 わたし達はすぐ た。 がこれ 彼は雄々しく挑戦的で 家主の許へ行き、発つことにしたと語りました。彼は、わたし達がよくやって 立派に喋舌るのは聞 、内面 43 の光が顔を輝かせ、これ迄になく美しく見えました。たことがありませんでした。彼は立像になったかと思 いる b

げがありました。 の日の夕方は特別に忙がしかった。これ迄になく客が多く、午前 早朝、わたし達は列車で発ったのです。 一時で売りつくし、七五 K ル 0

ホ " 劇

とにしました。それ る人を探すのだ。わたし達はニュー ればならない。それにはわたし達の考えを英語で正しく表現できないのだから、英語 たし達はすぐとりかかる計 からそこでドイ ツ人の同志達の助けをかりて、 ヨークで独 画を討論 しました。先づ鉄鋼労働者に宛てた宣言文を印 英のテキストを求め、ピッ わたしが ツバ 呼 U かける演説会を開 グへもっ に訳 して呉れ て行くこ 刷 しな

て貰う、フエー 着くと、"自立" (Autonomie) グルー が展開する迄、ニューヨ ークに滞在することにしました。 プで逢ったことのあるオーストリアの同 志、モ

夜働

3

0 です。

だが

その

夜は、

妻の

ペピイ

の子供達と家にいて、泊めて呉れるでしよう。 行しました。彼は製パン職人で、

ロックの

て、 彼女は 眠るように申しました。 わたし達がバ ました。でもわたし達は他にやることがあったのですツグや旅行カバンをさげて侵入したので驚きはしたが したが、迎えて呉れ、 食事を出

アナーキズムへ向け起ちあがれと火を吹くような呼びかけでした。 者に、資本主義のくびきをはねのけ、現在の闘争を踏み台にして、賃金体系をぶちこわ んとするところを理解しました。その日の午後、宣言文はできました。それはホームステッドの労働 ル の人は みです。わたし達はクロスだけは計画を話しても安全だと思ったのです。彼は イスでアナーキスト誌の編集人をやっていました。人に好かれ、信頼できるのですが シャとわたしは知合い 詩人の才能があ り、力強い宣伝文が書けるのです。事実、彼はニューヨークへ来る前 のドイツ人アナーキスト、クロ ース・チンメルマンを探しに すぐわた し、社会革 でかけました。 相当な酒 達の言 、セン 命 b

たし達がニューヨークへ帰った後、数日すると、ピンカート スが全国を衝撃しました。フリックはホームステッド工場群の周囲に、高い 、フリ モノン です。それ ック 4 ホ の雇い から真夜中、ストライキ破りを満載した舟 ラ河をのぼってきたのです。製鋼労働者はフリ ステ ッドの人達は数多く斃れ、 を追い返す工夫をしました。舟 その中には子供も居、 が射程 が ンの人びとによる製鋼労働者虐 距離に入ると、ピンカー 武 ックの動きを察知して、 装したピンカ 更に多くの人が 塀をめぐらし ートンの悪党共に トン共 沿岸 強固 つき 0) が 配 0

9 わが生涯を生きる

は 彼にあると言 気ままな殺 の行為は、労働戦線に火をつけるもので、今後追い込ま人には日刊紙さえたちあがった。幾つかの論評は、フリ ました。 込まれ ックを厳 た活動 しく が あ 非 n ばそ 0 責 任 3

た無実の血をみて意味を失なって わたし達はがっ 黙を破って、サーシャが言った。 りでした。 最早、宣 しまった。直感的にわ たな LI 達はお お 互言 い葉 のは 胸に E 流 1 れン 3 4 B ラ 0 をの 知岸 12 流

フリ ックこそこの犯罪の責任者だ、結果を引受けさせてや 3 h だし

怖をもたらし、 0 4 そう、それは反撃に移るべき心情の時節でした 執行者と考えられました。フリックを狙う一撃は極貧の穴ぐらの中にまで共鳴し、全世界執行者と考えられました。マリックを狙う一撃は極貧の穴ぐらの中にまで共鳴し、全世界、うそれは反撃に移るべき心情の時節でした。全国の人びとが湧きあがり、フリックは冷 ステッドの 闘争の背景に 米国のプロレタリアー ある本当の運動に注目を呼びかけたのです。それはまた敵 トが復讐者を持ち得るのを知らせたのです。 の陣営に が血 \$ な ホ

民衆のために自身を捧げる機会を待 ストになりました。 ーシャ は以前、 彼はスターテン島 爆弾を作ったことはなかったのですが、モストの「革命戦術の科 って ていたのです。彼はピッツで知りあった同志からダイ 0 です L° " ナマ バ 1 グへ行こうとしてい 1 トを購入し、運動 学 動に奉仕し、 まし た。

「わたし達も行くわ」

フェ ジャとわたしが言 不要だし犯罪だと主張するのです。わたしが言いました。けどサーシャ シャ は きい n ません。 彼は _ 人 0 人間 K 三人 0 命を

を中に はさみ、 坐って手をとり あ 12 まし た。 平静な声 で、 彼は自分 0 計 画

あ ことを知 6 だけ で自 調節 一分の行 生きの 付 びら け、 を 明白 n フリ コにし、米 れば " クをやっ よいとするのでし 一国の民衆に自分が犯 た。 犯罪 か 者 3 で はい うのです。 な < 理想主 n 者 は で

だ。 に E < ぼ げ て死ぬ くを殺さ 7 ックを殺 のを確信 せや ない てやる。 て、 誇ら to 3 か h 12 死 ぼく da だろう。 は死刑を宣言され でも ぼ < るだろ は 1) 1 グの う。 ように自分 でも ぼく は 0 手 自 で 分 0 死 \$2 命

は かず か らだ。〉わ 6 た b せざるを得 フリ る と権力のシ 0 た しは < です。わ た ぼ " 0 ク個 しは 1 行動にとっ 彼の唇にふれ ま せん 人は たし 彼 > の行動 ボ んでした。 シャ に向っ ル て沢山 人間としてのフ ました。 とメ 不正 かい て彼が 7 日なことが リッ と資本家階級の悪のシンボ " セ クを襲撃するのは彼を人間とし い彼 1 ジをあ 63 0 できる つけ リックは他の誰とも別 明 快 とに まし で冷静な力強さ、理想 なって全国に訴 た。〈きみは生ま きみは労働者達に ル である、と同 に考えている訳 える仕事 てでは その意味を説明する n 0 聖火 なく 時に 5 が の演説家 労働者 では どれ 、労働者の敵 たしをとりこに な 程 0 で、 血を流 った のだ。そ 重大 だと だフ 動家 であ L す た だ 3 責 か る " T 任 ぼ か 7

b 0 2 一つが、 b たし達 が 、彼は が " わたし 0 セー 血 8 をわ て出 ジ、 0 頭 を必要とし たし 脳を大 逢って、わたしが彼の声を聞 運動、義務、 の血 してい ないとい たあ 宣伝 0) 力に などのすべてを洗 いう恐ろしい事実がない。彼が語 比 べると、 き、彼に手 どん 12 な意味 を握ぎら だ んれ だ ば 7 合 しま h 品るほど、 10 n うの た瞬 0 てきま 間 で 0 から した。 b 7 L た

ン、たい 冷静に言える程、わたしの魂を彼に知らせなかったのでしよか。本当の愛は、それが凡庸の愛と違う るでしようか。共に過ごした三年の月日 ソフィ 愛する人と最後まで分けあうのではないでしようか ア・ペロフスカヤ、 でしようか。ロシアの革命家達はよくそれを知っていたのです。 あの人達は男達と生死を共にした。 は、彼が爆死したり、くびり殺された後でも生きつづけよと 、それは他のなにものにもまして、抗いが わたしだってそうするんだ。 ジェシー・ヘルフマ

それにたべついて行きたいのよ、わかるでしよ、サーシャ」 あると思うの。あなたより、フリックに接近しやすいし、活動の道筋をつけることだってできる シャ、わたしは一緒に行くわ、行かなければい けないのよ。わたしは女として手伝うことが b

は美と快適さにおいて自由になるのだ。そうです。この場合、 当化するのではな 子供達、同宿の人 間、わたしが見張 、わたしが見張りに立ちました。わたしはサーシャのために各瞬間が恐ろしかった。それに友人達わたし達は熱っぽい一週間を過した。サーシャの実験は人の寝静まった夜行われ、彼が働いている 人びとのために、わたし達は生命を捧げるのです。もし少数者がそれで死ぬとしても―多数者 いだろうか。 びとのために怖れを覚えました。 わたし達の目的は、抑圧され収奪される人びとのための聖なる運動で もし間違って暴発したら、―でも目的は手段を正 目的は手段を正当化する。

孤立無援

そのうち二○ドルは、ここへ到着してから使ってしまった。サーシャが爆弾の材料に相当使ったし、わたし達は、ウオセスターからニューヨーク迄の運賃を払うと、六○ドルしか残っていなかった。

グま 3-での運賃を加えると五〇ドルにもなるのでした。 クには未だ一週間いなければならない。その上、わたしはドレスと靴が必要で、ピッツバ

ろしいことが起きたのが彼の顔付きで判った。爆弾はうまく行かなかったのです。 的は話せないのです。 たしは発端から多額の金が入用なのは知っていたし、それだけを呉れる人は誰もいない。それに目 サーシャは準備作業を終り、スタテン島へ爆弾のテストに出掛けた。帰ってきた彼には、 七月の焼けつくような数日を遊説して廻わり、廿五ドル集めるのに成功しまし か

ドル ならないのです。 が無駄になった。 シャが言うのでは、化学処方が悪いのか、ダイナマイトの湿めりによるのでした。二番目 同じ材料で作ったのですが、それも大体失敗でした。一週間の仕事と苦悩、それに貴重な四○ どうしよう?わたし達は悲しんだり惜しがる閑はない。直ちに行動 立しなけ n 0

責任者だと指弾している。モストは助けて呉れるでしょう。 なら、この米国で、ある人間が遂に英雄的な行動を起こそうとしているのを知ったら歓ぶに違いない。 モストはきっとフリックのきたない犯罪を知っている筈です。その"自由"紙(Freiheit) は フリックが 彼

と組むようになって反感をもっている。わたしはサーシャの言うのが正しいと思いました。モストが 務所にいる間、 シャはこの思いつきを嫌がりました。彼の言うところでは、モストはブラックウエル て以来、わたし達と関係をもっていない。それにわたし達が、自立、グループ(Group Autonomie) わたしは繰返し手紙を書いたのですが、返事は呉れなかった。出所してからも逢っ 島 0)

7 3 で た はない のだ。そうです。サーシャが正しいと一緒に生活していて、彼女に子供 い。わたし達し を知っ は 7 大い きま

いない せる 筈だ。そうなれ 0 でもフリック として 同 7 しは 志 0 あ りまし がは彼にまつく 0 中 1 に一通 はどう た っわ すつわる疑惑や怪--0 、だろう。 たしは の書類 友人 0) 2 かず プカ あ 0 いなら間違いない 0 志 て、 を知 は 知った近同 E なく ストと違 は志 7 いたの 宣伝の少 理 解 の額 目的 L 7 機会になるだろう。 の遺 て 呉 彼ならわたし達 12 を任 あ れるだろう。 人 的 7 革命行動 金と銃 きっ 0 0 0 1 使用 率 一直な支持の画を認め ٤ をプ 援 カい 者 7 3 7 12 n は 違 にた。 Va

感じま た b 8 たしは翌日 L たがが だと最 また iz するわ たしは 同意できな 何 そうしなけ. らな の夕方 のために使うの プカート いと、 た しの 彼を探しあてた。 Un 第一印 しれば b がこの た きっとニュ 金 か教えて貰 彼はそ が 0 で貰えな 頼 む 証 \$ 1 彼は援助 なら宣伝がなられ つい ス 0 んが拡が た て何 で をきつい もし ない 価値 ば…と言 たが 彼は それ 0 が と答えました あ す ぱ ってい るの断 英雄 が新聞 る行動だと です。 った。 だとか殉教者になる人では かは言えない 0 の耳にも入るに とはっきり わ銃 めは たしはむろ L が るだろう。 そこはその計画が上 たがフ 打ん 感じま 明 金 1) けも 'n ブ るや した。 ルク on n 大勢の人 な 0 にな 生命 抵 プ それ 0 0) 他 を を誰

間 にこのことは ŋ ませ h で た。 でも顔に b n てい たのです。 サ + は、 金があ

きこむ を た事 達 ルド 買 たし達 衆に説明 0 力に押されました 0 12 とボ はす をする訳 動の決定的な要因になるん 要で そ の全財産は一五 れでも最 · 8 ウアはわ を するのがわた 打明け られ だ~ しょう。 ひとり 武器は 13 れない…と彼は思いないつもりでし たし 初 サー へしかし…〉と彼は言 、わたしの力も は実施すると言う。は b の日に食物 わたし達には金がない、それたしの任務だといいふくめるーシャは自分が扇動家にむか つもりで 質屋 がも 1. で行かせなけ ル で安物 でした。それ っと金を作る だ。それ した と泊る をつ 手て って ばなら 12 V3 0 2 いふくめるのです。わ の必要は にードル に今は、 だけ 入ま 間 63 こした。し 、それ いる。そ n ま よう。 した ない あ n か 、介ぼ ので シャ でも な 宛 ば ないこと、 わか 12 てられ < サー てわ 彼は 達の間 た を数日ぐら く達は特に貧 し一は挺 反逆的 たし 行 ま 2 どこで それは 0 す。 ャ < たしは で仕事を分担 な計 がピッツ 2 わ ·y わた 金を たし 画 泊 彼 " ょう。何も彼は止れるの議論に反対しな 8 ツバ " Va 0 てくれ 作 達 しの受持ち 15 するの 貧乏 3 余り 0 グま か服 T ブ 0 へ行き、 沢山筈 考 V から ゲニー だ。各自 たし 之 42 7 止めらか が少 な To だ。彼 0 す。 だっ 0 きま 吹きこみ、 び 在 に とを 要なも 、そ の行動 彼は の同 7 最 な 3 2 志 12 0 ぼ 5

笑 To たしは して サ 0 7 夕食会をし シァを元気づけ 15 ル に、 + E サーシャ P 才 なが ようと陽気に振舞つたが 11 1 が 冗 2 才 談 0) まで (を言いあい笑いました。わ夜、旅立つのだと話しまし # <u>V</u>. 2 ヤ だと話しました。 、それはす、 つい て行きま たしもにぎや り泣きを押 た。 で \$ 出発 友人 か 0 に 目 加 的 た b は 2

れ、わたしとサーシャはプラットフォームを歩き、お互いの胸のうちは言葉にならない想いで一杯で

低いステ を知らせて呉れ給え〉 一緒だよ。きみは 囁きました。ヘセーラ服のお嬢さん! ップに足をかけています。彼がかがみこん ^ご乗車下さい ぼくが自分の一番大事なものを理想のために…苦しむ民衆のため !> と呼ぶ わたしはサー (わたしに言う時の愛称です) 同志、 でわたしに顔を寄せ、手でしっかりシャにかがりついた。彼は車中にあ きみは最後までぼ かりわ に捧げたこと たしを つか

ました。わたしは消えゆく 列車が動 いた。サー シャは抱きしめた 列車の後を追い、手を振って呼びました。 わたしから力をゆるめ、ステッ プを離れ 3 のを手伝っ 7 呉

「サーシャ サシェンカ!」

追った。わたしからひつさらわれた貴重な生命を求め、わたしは両手を空にむかって蒸気を吹きあげる黒い怪物は、カーブを曲がって消えた。わたしはじっとたゝずみ 高 眼 でそ くさしあ とを げて

金を作るのに、街の女となる

想起した。あすこで特にわたしに訴えたのは、マルメラドフの娘、ソーニヤの性格出るのだ。どうしてそんな考えが泛んだのか不思議です。わたしはドストエフスキ たしはサーシャのため、どうしてお金を作ればよいか、一つの マルメラドフの娘、ソーニヤの性格でした。 明瞭な考えを得て眼 10 覚め 〈罪と罰〉を た。街 彼女は小

ることを嫌やがる。 なのです。 じ想い に横たわり、壁にむかって、顔をむけ、肩をふるわせているのを想い描きせさな弟妹達を養い、肺病の養母の悩みをやわらげるために売春婦になる。 なし〉わたしの内面の声が言う。〈サーシャは命をかけようとしている。だのにおまえは身体を与え わたしにむかつきを覚えさせました。わたしは枕に顔をうづめ、明りをしゃ断した。〈弱 のだろう?わたしの理由は彼女のより立派だ。サーシャのためなんだ。彼の偉大な行動は民衆 に横たわり、壁にむかって、顔をむけ、肩をふるわせて 心してベットをでました。 でした。感受性の豊かなソーニャが身体を売るのです。どうしてわたしがそうしてはいけ でもわたしにできるだろうか。お金のために見知らぬ男と一緒になるなんて…この 救いようのない卑怯者!> 自省をとり戻すまで数時間 るのを想い描きました。 わたしはソーニャが かかりました。わたしは決 わたしもほとん いくじ 考えは のため な E

にヒッ よろしい とでした。 わたしの主要な関心は、 ハイヒール プが大きい。 お化粧はいらない。わたしのカールした金髪は碧い眼に似合って わたしは鏡に歩みより、 で背を高くみせよう。(両方ともそれ迄身につけたことはないのでした。) わたしは廿三才でした。それにわたしはユダヤ系です。 街路で女の子を求める男性をひきつけるには、どうすればい 、自分の身体を点検しました。みたところ、疲れてはいるが顔 それからコル いました。で セッも セ 0 色は うこ

てきて 下着は自分で縫おう。 うのある白いリンネルのドレスを持っている。何か柔かい新鮮な色合い ルの靴、 グランド街に安物を売っている店を知っていました。 小奇麗な下着、それを買う金はどこにあるだろう。わ の材料 た 7 0 カ

ず五 たしは同じアパー して呉 トの中で、わたしに好意をもって呉れている女中を探しだしました。彼女は何も た。 早速、 買いものをして部屋に戻り、 鍵をかけ、誰からも見られない

ろうか?きっと認 外装にとり のためには か るでしょう。彼はいつも言 何んだって嫌やがらないのだ。 り、サーシャ ことを想 っていたのです。 13 ました。彼はどう言うだろうか?認めて呉 目的は手段を正当化する。 真の革命 n

ちの一人がひどくしつこいので遁げだしてしまったのです。一一時になるとすっかりくたびれてしまわたしは歩きつづけたけど、男の人が近づくと、わたしの理性はわたしに早足を命じます。そのう声がします。<しっかりしろ。サーシャは行動しているのだ。おまえがしくじったらみんなおしまいだ〉部屋に駆けこみ、安物の服をはぎとり、きれいに洗い落したい衝動に駆られた。でもわたしの耳許で 自己嫌厭のため泣きださんばかりでした。 T かりの男達をみて、その粗野な眼附きと女達に近よる様子をみると、気が滅入りました。 いてス ハイヒールの為、 九二年七月一六日、土曜日の夕方 商売しているのをよくみかけたところです。最初 足は痛み、頭はぐらぐら。 わたしは一 疲労としなければならないことができない 最初のうちはびくびくしなかった。で四番街を歩きました。そこは女達の行 でも 逃げ 列 だして 通りが が 43

初の男と一緒に行くことにきめていたのです。背の高いわたしは再度、努力しました。一四番街と第五大通りの ってきました。 特徴のある顔附きの、いい服装をした男が角、銀行の傍に立ちました。わたしを呼ぶ

「どう、飲みに行 頭髪が白く、六○才ぐらいで紅ら顔でした。う、飲みに行かないか「きみ?」

はわたしの腕をとり、モストがよく連れて行って呉れたユニオン街の酒場に連れて行こうと わ」わたしが答える。

0)

っここは よして 下さい

って キを注文しました。お互いに無言。わたしはその男がわたしの顔と身体をしきり ました。そこはいつかの午後、ビー その夜は混んで居 いた。それが嫌やになった。その時、彼が言うのです。注文しました。お互いに無言。 ばかりに言いました。それから彼を第三大通り、十三番街のサロンの裏戸に案内 テーブルを確保するのがやっとでした。 ルを一杯 飲 みに立寄ったことのある、奇麗で静かな所 喉がひりひりして、ビー に眺め まわ ル がでした。 0 かすのを 大ジョ

「ええ、そうよ。初めてだわ。でもどうして判った「きみはこの商売は見習いだね。そうだろう?」

判ったの?」

「きみ の歩き方をみていたんだよ」

と言うのです。それで未経験 あれ、それ です。それで未経験者だと知ったのだそうです。それから、わたしが街にでわたしが憑きものにつかれたような様子で、男が近づくと足早にそこを離れ はふしだらや恋の アバンチ 1 でこの商売に追いたてられていルを求めてのことではないと判 いっていま L た。 た る 理 0 由はみ な 7 13 でた

何千人という女の人 が経 済的 理由 10日本を大は山本町以外 る h だ b

たしはボ ケッと答えた。

できみはそんなことを覚えたんだね」

たしは彼に社会問題やわたしの理 四番街 しました。身分を明示してはいけないのです。も で泣きつい てきたと知るなら、 立念、そし それは大変なことで、 てわたしが誰 し彼が、アナ であるか 新聞 打 明 キスた は この 1 い気 Ł 0 な 工 7. に なっ 面 ゴ 白 13 た ル 0 K To 0 す 7

いと言いました。わたしに言いたいのは、その商売が習慣にならな彼はわたしの言う経済問題は興味がなく、わたしのこの夜の行動 いたいの は、その商売が習慣にならない限り、売春なんてないんだそうなく。おたしのこの夜の行動の動機が何んであろうと関心はな

彼は一〇ドル 幣をとりだしわ Va にしわたしの前に の前に置きました。こにいるのは、それど が できるひとなん

「これを持って 家に帰りたまえ」

「でもわたしを連れて行かないで、どうしてお金だけ呉れ るのです?」

「ふむ、そういう具合に着飾らなくちゃならなかった費用を出すという訳さ。 その安物の靴と靴下がなければなおよかったろうにね きみの

わたしは言葉をのんでびっくりしました。

街で拾ったこの人は、わたしと一緒に酒場の裏部屋にいるのですが、 たしには興味がありました。彼は金持ちに違いない。金持ちが何んでもないのに何かを呉れるで の欲望だけ女に与えようとするのです。わたしは二種類の男に出逢っています。 、その中でも教えの通り実行できるのは、ロシアとユダヤのラジカルな人達だけです。 製糸工場主ガーソンを想起しました。 彼はわたしの賃金を僅かあげることだってしたが 理想家達は、両性の平等を 俗物と理想家です。 前者は女をもつ機会を絶 全く新らしいタイ 、少くとも理論上 一では擁護 対 プでした。 13 わたしを 5 洮 なかっ さず b

こそ何 かで読ん だことのある魂の救助者のひとり、 **= 1** 3 ク市を悪徳か 3

とりなのでしょう。わ たしがそれを話すと、彼は笑って、そんな忙がしい 人間では無

憎悪するだろう。 「むろん、そうだとすれば、ぼくが間違いを犯すんだが、それもいいだろう。と答えました。わたしが本当に街の女になりたいなら、それもかまわない。 きみが街の女になり た が 2 T 42 な いこと だ。たとえそうなったとしても、きみはそのを犯すんだが、それもいいだろう。ぼくに判 でそい 7 れるの

ではそれが本当でな かったら b たしを情婦にする りだろうか

つでもそうなの?」わたしは訊ねた。

なんだけど考えなしで無経験、子供っぽいのさ」 「それごらん。きみはちょっと言っただけでおびえるし、それでいて街の女になり たが

たしは先月、廿三才になったのよ」

子供あしらいされるのが厭で抗議しました。

「じゃおばさんだ」彼は苦笑した。

鹿げたことをやるんだよ」 「だが年寄りだって、森の中では赤坊になるのざ、ぼくをみてごらん。六一才だけど、ときどき馬

えば、わたしが無知だと信じこむようなことなのね」わたしが答える。

彼の様子の単純さが嬉しかった。わたしは彼の氏名と住所を訊ね、いつか一〇ドル も彼は わり、ミステリーが好きだと言う。 路上にでると彼はわたしの手を暫く ŋ

れずに展々とした。 夢の中で、 + シャ、 フリ " ク、 ホ ムステッド、 一四番

布にとまった。 街、そしてあの丁重な男が現わ は実際に起きた事件なんだ! わたしは飛びあがって、 た。眼覚めてからも夢はつづいた。わたしの眼がテー 震える手で開けてみた。 _ ○ ド ル 紙幣があ つった。 ブルの上 それ なら 0

る 次週の土曜を行動日と定め、必要な金をすぐ送れ たしが病気なこと、一五ドル必要なのを知らせま いるのです。でも手紙には失望しました。その調子は冷ややかで儀礼的で しい気持でした。 しさを知っているので、金を無心するのは厭 一五ドル欲しいとヘレナに電報を打った。 して同列に考える けで計画を実行 の見知らぬ人だって書かない代物でした。すぐわたしはそんな考えを払いのけた。 曜日、サーシャの短い知らせを受けた。 しかです。でも、 しょうとしているのに、そんな考えは不謹慎です。あの見知らぬ人 のだろう。わたしはわたしの人に金を作ってあげなければいけな 以前 セント ペテル ス わたしの姉には何週間も便よりをしていな 脈だった。 ~ は した。わたしが病気だと思えば、金を都合してくれ と書いてきた。彼はわたしが間カール・ノールドとヘンリー・ グにい 犯罪だと思った。でも遂に電報を打って、 た時も一度欺しているの 自分の愛して 違い が T いの とサ ない に逢 サー いし、 12 だされ、 だ。 と確信 いる女なら シャは生命 -シャをど 7 彼女の わたし いた。 して

K ナから電報で金を受取った。わ を返しました たしは二〇ド ルをサーシャへ送り、服をととのえるの に借 ŋ て

サーシャ、フリックを襲撃

歩き廻 で行かせまい の土 り、夕方はサーシャ が一緒に 曜日を待ちこがれる気持が状況を悪化させた。七月の酷暑の中を落着きなく、 クへ戻ってからずっと職につけなかった。サーシャが出発したあとの数週間は、彼をひ と張り 加わっ 7 つめた心のあせり、街の女になりかかった事件、それにヘレナを欺したみじ とよく夜を過ごした Zum Greben Michelへ行った。 b たしを完全に打ちひしいだ。その上、サーシャ が行動日にきめた七月 あても

字がみえた。 七月廿三日、土曜日 0) 午後、フェ ジャが新聞を持ってわたしの部屋へ駆けこんできた。太組 文

告輩:別チロントがからのは、フリックを狙撃アレキサンダー・ベルクマンと名のる青年、フリックを狙撃

- 酷薄な闘争による労働者の過剰防衛殺人―

したんだ。労働者が彼を利用した筈はないんだ。 労働者達がサーシャを過剰防衛に利用したって?新聞 は嘘をつい てる!彼は労働者の た 8

殺すのだ。 重要な事実が明白だった。われわれの立派なサーシャが行動を実行したのだ!フリックはまだ生きて た たしが結果を引受け、責任を共有すべきなんだ。 でも傷は致命的だ。彼は多分その夜は生きのびないだろう。 し達は急いでその日の午後の各種新聞を買い集めました。それぞれ る きっとそうなん わたしは喋舌っているだけでいいのだろうか?わたしだって同じだけ だ。わたしは彼をひとり死なせていいのだろうか?彼がた、き殺されよう サーシャはどうなる。奴等が彼を の書き方に差異はあ 償うべきなん いったが

説するとの記事をみました。〈彼ならきっと、 たしは自由(Freiheit)紙で、その日の夕方、モストがドイツアナーキスト第一地区の人びとに演 サーシャの行動を言及するだろう。 会合にでてみよう〉

00 よう かい 12 7 21 C つもの調 2 てた ません。 子 で話 L 彼は たが 老け + ーシャの行動は、演説てみえました。ブラッ 演説 の最ウウ 後 工 0 ル 部 分 刑 で 43 0 つ

聞 何 か 0 しなけ でつ 新 フリ ち は n " ばなら クは世 げべ クマ な か かい 0 ンと 反 2 お かしいり名立 た して 0 だ。 いる 前 0 のを \$ しかが 知 L 2 たフ 7 5 1) 42 る 7 " リク だか ") 0 7 命 のを 5 部 2 0 下 2 潮 がた 、と言 むきを自分 同 情を買い だ うが 12 ょ た 2 めれ 3 には す 3 やい た つつ た 8 に 0 0 は だ新

きら 0 b たしは自己 だろうと思 2 たこと 12 分 で印象を受け った 7 の耳を疑 わた 42 ました。 7 は周囲 いるの が 0 みえ 人 L び た。 とを眺 2 T 出 口 8 E ス 0 多く 近く を の凝 で 疑ぐ 顔 2 に 驚きを認 り深そうな顔付きを めし また。 L た。 む 3 聴衆 した h 数 0 2 中 人 K 2 は 7 彼い

を E 3 5 て、わ つつた。 たとえモ 彼は フリ マスト 幸 " クトを求 が素面であっ " 部下』なぞと言う 2 たわとた LL たは 講演 話 6 を作 刑 者 2 事が た 連酔 0 を情払 か がっ ? った て状 は い態 T " 3 か聴 ~ 衆 ル 3 7 での は前 7 なに > いが かつ

たし T には答え 数時 ない 騒ぎが 間 0 b たし達は 頂 心し 点 12 た達 街 わし た 路を蛇行 ししはた 、フェ して、 L ジャや 彼等をまき、ロウ公園 とそこを立去った。二人の男めなければならなかった。モ へ行き、 日 がわ ス 日 たは 0 Ĺ

0 1 7 ロヘルン T を割 連 クマ をか 1 + 13 12 受け 7 n 1 0 6 7 ンは な だ。 行 ピッ づちで せようと彼の顔を砕 て、 かれ 床を 0 薬包だっ ツバーグのホテルに投宿 2 ても、 叩き に崩 いて、 れを訊問されたベルクマンは、反抗的な態度で、〈アメさ〉と答えた。 建物内の大工仕 13 づ 伏 n n, かせた フリッ 彼は一言も フリッ 警察は共同謀 クの かんばかりに一撃をくれ に助 は 8 事をして クに近 喋舌らなかった。 していた労務者達が駆け込んけにきたのは、その際にいた 務室に押入った。次いで フリックは死んだと思 した〉としていた。 議を確信し、共犯者を捜査中で、 づくと、その腰を短刀で刺した。そ 7 刑事の一人は、 人人。を読 下事の一人は、ベルクマンの れたのだが、やがてうめけ込んできて、その中の すぐ 2 補佐役 砲 した 0 ライ の後 12 フ 0 ^ シリ 回のカプセ 顔 意識を失 15 7 " 付きに ひと 7 き声をあ を は三発 メト 調 だと新聞 查 ŋ 0 T フと の結 11 12 がら げ 0 2 ~ 果、ダ だち、 た。 た。 は報 Vi ル クマ を身 ~

7 T のです。 うのは嘘だと思いました。 のです。〈ピストルが爆弾と同じように失敗したら〉それを使うんしは、全体的にみて、新聞報道は正確だと判断しました。サーシ は毒が塗ってあった。フリックは助 労務者達がその敵 であるフリッ 彼がフリッ クを助 ク以外の人には からない。わたし け たと言うのは信じら 苦し みを与え は、 サー だ と言 n 2 は + な W たか と決 がライシ って を塗 0 プたカ 心し いまた た短 7 7 L た 刀 いン たに を のを そう 用 意 な

金と銃を与えたがった プ(Group Autonomie)の のか言 人達はみなサ b なか 0 たとせ め シャ ま の行動に興奮 た。 b た しは彼を払 しま 12 0 17 が わ のた

です。 ー・ベルクマン、ホームステットの人びとを殺した者への復讐〉と題して熱烈な賛辞を書きあげたのたしは主題を冒瀆しはしないかと恐れました。用紙つづりを幾つも無駄にしたあと、〈アレキサンダ一度 Freiheit 紙に投稿した経験があるだけで、出版物に書いたことがありません。不安だった。わその英雄的な行動にあてることに決定した。わたしは、サーシャに就いて書くよう依嘱された。けどこのグループは、週刊紙の次号〈アナーキスト〉全部を勇敢な同志、アレキサンダー・ベルクマンと このグループは、週刊紙の次号〈アナーキスト〉全部を勇敢な同志、アレキサンダー・ベルク革命家であり、わたしの訴えより、自分のことにかまかけているのを知っていたのだと答えま した。 الخ

され った〉としているのです。またピッツバーグでノールドとボ ました。 ていたのです。Freiheit 紙であからさまにではなく、間接的にまた陰険な仕方でそれを吐きに対し敵意を貯え、わたし達が彼の憎悪しているプカートのグループに参加したのをひどくアナーキスト紙の賛美的な調子が、モストを猛けり狂った雄牛のように怒らせました。彼は していなかった〉からだと指摘していました。 つけ、彼等はフリック襲撃の企てとは何の関係も た。次ぎの週の Freiheit はフリックを厳しく攻たのです。Freiheit 紙であからさまにではなく、 サーシャはゆがめられていました。 次ぎの週の Freiheit はフリッ モストは論文の中で、サーシャが〈オモチャクを厳しく攻撃しました。でもフリックの襲 のない、何故・ なら彼等は〈最初からベルクマンアが逮捕されたのを不隠当な言葉、サーシャが〈オモチャのピスト ルクマンを信 れを吐きだ 数撃は低 3 悪サ ルを し始 評 < 1

は嘘をついているのです。特にカール・ノールドは違います。サーシャはカールがどれ程、自分に友交話さずに立去ったからです。しかし、彼等がサーシャを信用していなかったと、モストが言う時、彼話ろん、この両人が、計画された行動について知らなかったのは、本当です。サーシャは、彼等に けわたしに書き送ってきました。だからモストは、 サー シャを不信する自分の気持から、復

似し、愛していた人!

したのだ。やらせておけばよい あ な権利があって、サーシャを攻撃するのでしょうか? たしは尊 びとに聞え、判るようにそれを告知したいとい がった。わたしは彼の痛撃を打ち返 に目して を受けました。サーシャに対する いたにしても、わたしの し、大きな声で 63 人 0 的感情 す 中では荒 が何 う熱望 らな で 々しい海 サーシ b にさい たし 2 たにせ + 0 ツバメであったヨハ なまされました。モストは宣戦布告の純粋さと理想主義を叫び、全世界 心には彼に対 よ してサー だった する激 の激しい恨みハン・モスト だ。 シャ を示 をい いされ みが も競争 が 3 1 سح

b ・モスト、エマ・ゴールドマンその他一党のその間、日刊紙類は、アナーキストに対し激 になって現われ たしが宿泊していた友人ペピーの家は、警察署から一つの角を回になって現われました。警察は忙がしかった。エマ・ゴールドマ の名前は、これ ました。警察は忙がしかった。エマ・ゴールドマンを追いかけ始以前ほとんど新聞にでることはなかったが、それからは連日、セゴールドマンその他一党の扇動者〉を狩りだせと警察にけしかけべは、アナーキストに対し激しい挑戦キャンペーンをしかけてきたておけばよい。わたしは〈アナーキスト〉紙で応戦してやるんだ ンをしかけてきた。 0 ンを追いかけ始 五通り ン 3 彼等は セ 0 ショし ので アす。 た。 + ヘヨハ ル なわ

たしはサーシャの実験で残されたものは、すべて処分しでも彼等は探しにきた目あてのものはみつけられなかっ 持物をもち去りました。わたしが集めていた革命 した。わたしはよく署の前を大っぴらに通行して、自立(Autonomie)社の事務所 、ようやくわ でも警察は、わたしを発見できなかった。ある晩、わたし達が会合に出席 たしの徘徊をつきとめ、非常口 l から パンフレット、 ていたのです。警察は罪た。新聞にわたしの氏名 アパート 1 押しこみ、 写真類、手紙 た五番街第 警察は罪に 手あ 類は から 初 す で時間 二五通 U た るため 0 め 消 n てで えて 仕第 かけ を過 た時 しまっ にわ 出 3 かけた しまし た L た。

た男をその でみかけ 情報を告 なか 3 0 0 とが た 召 かと言われ できな 10 あ とを追 か つ た 強く否定しました。 のです 67 口 b した。 彼女は刑 か 事 L この召 が 示 したい サー + 0 0) 写. 真 に

同 犯に仕 二日経ち、 立てあげられました。 ロックはロングアイランド 家主は部屋 0 明け To 渡 しを要求 12 てい た が した。更に厳しい ピッ " バ グへ拉致 さつ れづ Va た サ 0 で 1 す。 ヤ 0 ~ L°

だとして、屈服しました。軍隊は誰を保護するためにきたのかす ではなく、カ 撃後、数日して、軍隊がホ した。保守的分子は民兵が ルーネギー の工場を守るためでした ピンカ " 1 F ンの新 しいた 攻撃から、 , ° Z きに 4 自分達労働者を守 判 は、 明 した。ホ 鋼 労働 1 4 ステ 5 0) て呉心 " K れ的 0 3 な \$ の分

軍法会議 つづい け 勇敢な青年は、〈フリックを銃撃した人に万才を三唱しよう〉と兵士達にれど民兵の中には、サーシャが労働者への悪業の復讐に起ちあがったの にか けら 苦しい日々 捕縛されてても万才はやめなかった。この 0 中で、唯一の明かるい一瞬でした。 事件 は、 サ 呼びか 3 + けめ が 出 た た 発 0 人 です。 かい た Vi あとか 彼 L は

を送る 1 不安な だ〉と…彼は強調していた。 ことができないだろうか?彼は運動にとって貴重 ぼくは精神状態が良好で、自分の法廷での陳述を用意してい た。〈米国の軍人でさえ眼覚めたのだ。 が過ぎて、サーシャ むろん弁護士はつけない から手紙 がきた。 ぼくはあ 彼は例の民兵 本な宝 だろう。 である 0 人 12 W ロシアや 。でもぼく 連絡をつけ 1 る。弁護 = | T 4 D の身柄 0 アナ " では 18 起 7 の革命家 つい な 勇 + ス 気 7 1 づ はのけ

隠す しただけだった。 ル イス たよう た 7 めにわ 何ん につ へ発つこと、彼等に別 は と馬鹿げ た し達はこんなあ ての彼の立場を知らさなけれ 2 分の事件 た。〈弁護士を使うなんて、アナー 支等こ引れを告げ、それかたことをするんだ!彼等は は自分で陳述する だ名を使って いた ばなら 0 5 しは ぼ < ホ な ť 0 どうしている?当局がノールドとボい。ヘハンス・ウルスト(Hans Wurst + " テ ルに動 ストバ -を知りやしない ンス・ウルスト(Hans Wurst) (モ にとって矛盾である。〉わたしは同 室をとって、バクメト グの 有名弁護士が無料奉仕 。〉事実、彼は自分が フの名前 アを捕 をか ス 志 つて で セン トを える に

たが b たしは手紙を胸にあ 、それがどれ程強いものかよく判 て口 づけ た。 りま サー した。 シャ は b た L ~ の愛情や 想 42 12 0 Va て、 一言 \$ 6 な か

b だろうか 書きました。 たしがそれを翻 0 b 英語はわたしと同じく、法廷で効果を現 た。また自由 意に同意したこと、大きい集会を準 たしは彼 2 。でもサ たしと同じく、法廷で効果を現わすには余りに貧弱が自分の事件を自分で陳述するというのに驚きまし かい また自立グループ 起ちあ 感心するけど、 訳 紙(Freiheit)に現わ それ すれば、わたし達は全国 シャ り、イ にしても の意志は、今迄以上 彼だけ タリア (Autonomie)や モ ストが、 かず 0 サー ï 命 家達 シャ にわ サ П 7 0 ュ 人 は できる とその 4 シ の勇気づけ た びとに成行きの ヤ人 の行 ヤ しにとって 0) だけ 同 動を十分説明 動 志 2 8 0 T を賛美しているのではないことを付記し 0 中に支持 わらか 態度も 神聖だ 羽でした。彼は難した。彼は難した。 た。彼 す る モ べてを公知できます。わ Ĺ スト く伝えたのでした。彼を悩 書き送りました。それ ったから、 があ 観を正当化し その動機も正 n, は機会を失うので 彼が 社会主義のVolkszei 公開裁判 たのを認 しく伝えると きで たし 7 か を受け らあの は が彼 め な た た 12

希望しました。わたしは元気になった。サーシャにはまだ真の献身的な同志がいたのです。 て、 きま ました。イタリアのアナーキストで、 0 って 免除され 人でした。 いたの たのです。 だが、ニュ 一年前、わ サーシャのため デイル·D·ラムはアル ーヨーク州知事 たしが彼に逢 に大きな集会を準備した。 当時ニューヨークに滞在していたサバリオ・メルリノも演説を った時、彼はマント製造業者のストに関連して、刑務所行きが が労組の要求をいれ、また彼自身の許しを乞う手紙に応え バート・パーソンの親友でしたが、彼も発言を志 ヨーセフ・バロンデスが支援 を申しでた最 願

局は介入 、思いつめた様子なので警察は手だしできません。 大衆 の集会を呼びかけたわたし達の大きい赤いポスターは新聞の憤激を呼 しない のか?警察が集会を中止するよう脅迫したのだが、 開催 日の夕方は大勢の聴衆が びさました。どうし 集ま て当

情に 者はひとりひとり、サ こめて語りました。 b たしは議長になったが、新らしい経験でした。他に人がいなかったからです。 ついての、 わたしの厭 厭悪から、サーシャの高貴さ、無私、民衆への奉仕につき、わたしは熱情をシャの人柄とその行動を賞賛しました。理想主義者を暴力活動に走らせる世 集会は活発で、 演

のさば 翌日 たか宣言できたら!彼等がほんのちょっとでも知っていたら! せるのか?〉全く、わたしがどれ程、自分の自由を投出し、誇らかにあの行動に参加 新聞はわたしの講演を〈憤 激に駆られて〉と報じました。へどういう理由で、 -0 危険 な女を L たが

ピー!彼女はわたしのために苦しめられたのです。遅くなった集会の後、わたしが帰っしい家主はペピーに、わたしにでるよう頼むか、空け渡すかしろと申し渡したのです。 可哀そ てくる

警察に 3 を片付けたのです。 しま からだと泣きじゃ に いたペピーを捉え、 つきまとわれるのはこれ < たのです。ペピー 叩く と、遂に \$ バッグの 応えない ペピー くるのです。わたしは黙 彼女を乱暴にゆすって、 は泣き崩れました。 0 のです。 部屋の扉を開けようとしたのですが開 0 以上我慢できないから:と言うのです。 が現われ、女主人 か が帰 わたしは驚き、何事か起きたのでは って来るまで玄関に坐 って外 彼女がわたしを閉 がわたしに部屋を離れるように言え、自分は家主や しかそ へ出 臆病 ました。 者と罵りました。それから寝室に入り、持物 0 日の朝 ってい 入れ めだした きません。 ました。 わたしは召使女を押しのけ、 ておいた筈です。管理人を起 のは ないかと不審に思った。そ わたしは何度かノック ようやく人が来て家の 子 供 達が 刑 事を怖 かい

食を拵 もわずら 部屋を嫁に行ってい わ た え、もてなして呉れました。 が病気だろうから一緒にいるようにと言うのです。 しは祖母の家へ行 はせずに出入りできるのです。 [入りできるのです。祖母はわたしにベットを与え、娘と一緒にわたしのたた娘の家族と共に使っていました。わたしの居場所は台所で、そこは家族 った。祖母とは長く逢っていなかったので、 ベットを与え、娘と一緒にわたしの 彼女はB通り一〇番街に雑貨店を営 わ たしの顔 をみ て驚きまし の誰を み、二 た。 に朝

たのは n した〉という意見でした。厚かましいのは、 は、フリックが傷から立ちなおるのを報道しました。わたしを訪ねてくる同志達は、サ ていない 正しかったとほのめかすのです。わたしはその変り身の早さに心が傷んだ。サーシャ シャ のは知っていました。時折、ピクニックで標的射撃に参加していたけど、 フリック殺害に失敗したのは、ピストルが安物だったからな モストがへあれ はオモチャの ピストルだった〉と んだ。 それで十 ・シャが が射

たしが 7 \$ う に た三発 放されたと言うの b たしは いてやろう。彼 0 同志達にそう説明しました。でも 5 つある がフ らだろう。 です。 0 回 ックの b りに そうなん わたしは憤激 身体に入っているのです。治癒できる たつ恐ろし い治療を受けているからなんだ。米国 しました。 12 噂を差止める言葉を送って貰おう。 彼等は納得できな 12 どうしてサー いのでし シャを疑う 0 は た。 7 リッ 2 のでしょう。 あ る人 クの富 スト は サ 0 お 12 b 3 か

った。 な苦 なの 間も しむ人 は な < が 0 !わ 行 サ L いの た 0 シャから短 動機で、物理的 しは手紙 です。 の行間 い手紙 要な な成功 0 12 がきました。彼はわたしが釈明を求めたのを怒っていまし は彼 フ 0 1) か失敗かではない筈だ。それが判 動機であって、それは ックが生き永らえていることを知 誰 も疑えない らないのか?わ った彼の h だ。 胆 た 3: た。 ŋ 0 を 不幸

一房に入 けたが 宣告できな シャ っと耐え抜 たが の裁 3 わたしの名前は くだろう。 42 が 7 12 ペンシル が一杯でし つ始まるとの たの 自分を失 れた。 だが ベニアの 家主を震えあがらせるだけでした。 七年は長 たしは自分 いたくな た。祖母 フリ 知らせはなく ックが回復した事実は、彼の法的身分を相当に 同志達を通じて、 の家は 時間だ。でもサーシャは強い。彼は鋼鉄の忍耐を の全身を賭けて、 7 ので 満員 何週間も過ぎました。彼はピッ で、わたしの滞在も長 彼の襲撃は七年の徒刑を法律が求 この新らし 友人達は 63 可能性に びけま 偽名を使うよう教えて ツバ せん。 期待しました。 1 変え 部屋を探し もって まし め ること た。 0

近く b イランド たしは 7 哀そうな老い にい 63 る 7 て守っていてやるから のだろうと訊ねるのです。ト はよく n の美しい長靴の中に物語 が都合よく守って呉れるのを知りました。医者や警官は、 レスを着け、グレ れの引 りのカ き馬は フェに朝の三時頃までねば イのコ 、わたしと同じぐらい 午睡をして行くようにと言うの をつめていて、よく楽しませて呉れま > 1 プキン広場では、若い警官が特に をきていたから、看護婦のユニフォ 疲れ果て、歩み 路面電車でブロンクスへ往復しまし で す。 がのろか b した。また時 親切でした。 たしが職務を終えて、散歩 った。 1 ムにみえたのです。 には、 たしは 彼は自分のア 自分 青と白

「きみは 疲れ てるみ たいだ。働きすぎるんだろう?」

か たらどうす され Ł 7 だろ る自分がお可笑しくて笑い 働かなければならず、僅 か だしました。この な休憩時間しかないと語 警官は大人なしそうな看 りました。でも 心 の中では 護婦が誰 だ

売春宿に落着

週四ドル る日 第三通 、わたしは入って行きました。身分は訊 り四番街はわた でした。環境も風変りでしたが借りることにしたのです。 しがよく通るのですが長らく ねら れなかった。その 貼紙 が でてい 部 ました。〈設備 屋 は 小さい 0 0 に間 43 代は間 高く、

わが生涯を生きる

夕方、 0 た。 その家は全部が女性の間借人なのを知りました。 衣服と本類の荷ほどきをし て、 何週間 か たちました。 初めは気にもとめず、 床を洗ったり、清潔なベットで寝は気にもとめず、持物の整理で忙 で寝ら が n

快適なものです。わたしは早く引籠るのですが、夜中になるとドアを叩く音に起こされ るの

「どなた?」深い眠りからさめ、うとうとしながら答えます。

んだい。きみは今夜、来いと言ったじゃないか」 オラ、入れて呉れ ないか?ぼくだよ。もう二〇回もドアを叩い 7 V る んだぞ。 どう

「部屋を間違えてますよ。わたしはヴイオラじゃないわ」 わた しが答える。

ました。でも動かなかった。サーシャが行ったあとの何週間にもわたる苦労、家なし子の すでにアナーキストは酷く悪しざまに取扱われていたのです。エマ・ゴールドマンが売春宿で見つか 中で生きるのは気持が悪かった。あの見知らぬ人の言ったのは正しい。-はないでしょう?わたしはこの家にと、まろうか移ろうかと思案しました。周囲で見聞きする生活 得させるのに随分時間がかかりました。でも婦人服の必要な娘さんが一杯いるこの家ほど、 わたし の性にあった若い娘でしたから、或る日、コーヒーに招待しました。イルドとか呼ぶ。わたしはとうとう自分が売春宿に住みついたのか判 〈おかみさんのいる普通の魔窟〉ではなく、男を連れこんでいい貸部屋だとのことでした。 たとなれば、それこそ資本家のひき臼でこと細かに碾いて呉れるでしょう。移る必要があると思 のです。それから新聞が、 同じことが毎晩、何度もあるんです。男の人はその度に、 洋服の仕立てをしているのだと答えると、彼女はひやかすのです。男客をとるのではないと納 が若いのだから、よい商売をしているでしょうと言いました。それでわたしがその方の商 わたしはとうとう自分が売春宿に住みついたのが判 わたしの住みついた場所の性質を知ったら…という恐れもありました。 アン ネットとか、ミル 彼女から聞いたのでは、ここが りました。 ーわたしはこの方面に慣れな 隣部屋の女は レド とか 適当なの 彼女は、 りを わ 売 たし ロス 0 で

んしなければならないと言う予想が、他の考慮に勝りました。

初めて生活費を稼ぐことができるようになりました。自分の落着き場所ができ、 小さな善意の助けをすることで親切を競い合うのです。わたしはウオー た。でもわたしの生活は、長く円滑にすすむ運命になっていない した週が終る前に、多くの娘達の信頼を得ました。彼女達はわ たしに仕立物の仕事を呉れたり のでした。 セスターから帰っ 新らしい 友達もでき て、ここで

モストを鞭打つ

モストの論文<行動による宣伝についての反省(Attentats-Reflexionen)>が八月二七日付のFreiheit です!わたしは彼が自分の書いたものを信じているのかどうか疑いました。彼のその論文はサーシ で行 され て何 たのだろうか?モスト でました。この論文でモストはそれまで熱心に擁護していたもののすべてを逆転させたのです。 憎悪からでたのではない たモスト、挑戦と反抗の体現者モスト、その彼が今になって行動(Tat)を徹底的に非難する 幾度も暴力行為への呼びかけを聞いたあのモスト、 るのは辛かったが、サーシャが中傷され、悪口されるのは耐えられなかった。丁度、その頃 か非難を掲載しない週はほとんどありません。一度はわたしを愛して呉れた人から、 とわたし達のグル わたしの足許で砕け散 ープの反目は継続しました。自由紙 がわたしを豊かにさせて呉れた世界、あれほど色彩と美しさにみちていた だろうか。それとも彼に共同謀議を負わせる新聞から身を守るために った。露わになった事実、 モストが自己の理想を裏切り、 圧制者打倒を叫んで、英国では刑務所に (Freiheit) が、サーシャかわたしに わたし達を 悪く名

たしは一本の鞭を買いました。 モストを裏切者、卑怯者と呼びました。Freiheit 紙からの反論を二週間待ちました。でも何も掲載さ 公開で彼に挑戦しようと決心しました。わたしは〈アナー わたしは彼のえん曲な言廻わしをあばき、危機に直面 何の釈明もないのです。 わたしは彼がその卑劣な非難を正当化できないのは知っていた。わ しての突然な態度の変化を説明させるよう、 - キスト〉紙で彼の論文に答え、説明を求め

るよう要求します。 に握りしめていました。彼が起ちあがって、聴衆に向いた時、わたしも起立して大声で宣言しました 「わたしは、あなたがアレキサンダー・ベルクマンに対し、えん曲に言及する根拠を明きらかにす 次回のモストの講演で、わたしは最前列の講壇の低い場所に近く席をとった。鞭は灰色の長衣の下

他には何もいわない。その時、わたしは鞭を取りだし、彼に飛びかかっていった。数度、彼の顔と首一瞬、沈黙がひろがった。モストはもぐもぐと〈ヒステリ女〉とか何んとかつぶやいていましたが 誰ひとり介入する暇のない出来事でした。 って、その鞭をわたしの膝の上で折り、 折りくづは彼をめがけて投げつけました。

それから、わたしは手荒くひき離された。

「外へ放り出せ!ぶんなぐれ!」

に他の友達が救出して呉れなかったら辛い目に逢っていたでしよう。彼等はわたしを身体ごと差上げ聴衆がわめくのです。わたしは怒り狂った聴衆に取囲まれたので、運よくフエージヤ、クロースそれ ルの外へ力づくで道を作ったのでした。

入場が拒否されました。わたしが公開の席上、彼等の敬愛する師を罰 の抗争は激烈を極め、モストの信奉者が固めているイーストサイドのユダヤ人の集会では、わたしの のです。ある人びとはモストに就き、 敵意を惹起し、 、またサーシャの動機についてのえん曲な言い廻し、それにわ キストの陣営に、 の反目ではなくなったのです。全アナーキスト運動内に嵐を呼び、 が行動による宣伝につい わたしを賤民にしたのです。 大きな亀裂を生みました。最早、モストとプカート及びそのそれぞれの信奉 て、態度を変えたこと、サーシャの行動に対する彼の敵意に満 他の人びとはサーシャを擁護してその行動を賞賛しました。 たしに向っ したのが 敵対する二陣営に別れた b ての彼の攻撃などが、 たしに対する激し ちた

サーシャは生きながらの死へ…

そしてサーシャは、廿二年の刑に処されたのでした。生きながらの死へ線路が敷かれたのです!ホー た。わたしは演壇にあがろうとしていて、一通の電報を手渡された。 でした。九月の第二週目、わたしはバルチモアで講演を依頼され、一九日月曜日に講演する計画でし 他方、 と聴衆が コップの水を唇にふくませるのでした。同志達は、この集会を中止すると言います。 わたし達は、サーシャの裁判の日が規まるのを心持ちしましたが わたしの眼前で回った。 誰かがわたしの手から電報を取りあげ、わたしを椅子に押しや 裁判はその日に行わ 何の知らせも入りません れたのです。

0 わたしは取乱した様子で身辺を眺め、水を飲み下すと、電報をひったくり、演壇に駆けあがった。 の黄色い 紙片が 熱い 石炭のようで、 その火がわたしの胸を焦がし、 熱烈な表現になり

37 わが生涯を生きる

ま

達は、 した。 報を握りしめて 警察官が乱入 していたパトロールカーに押しこまれ、署へ連行された。怒り猛る群集が後を追ってきま Ĺ いました。警察官達は馳けあがって来て、議長とわたしを逮捕しました。路上でわ 棍棒をひき抜き、聴衆を健物の外へ追いたてた。わたしは壇上にたったま > たし

荘な夏の家で養生しているのです。あ る筈の魅力と美を湛えたま 最も感じやすくいきいきとした年令なのです は生きながらの墓で廿二年過ごさなけれ れ、太陽と光を奪われるのです。それなのにフリックは生きながらえ、傷もほとんど治って、その宏 の恐るべき刑 たしの顔面に突き刺さった。 な知ら の宣告が に ふくれ せ が入った瞬間 あがる熱 わたしの眼の前 , 手を差出しているのです。それなのに、彼は強い若木のま、 から、 い涙をこらえていました。でもそうしたさしさわ 0 わたしは聴衆に囲まれていたので、自分 での ばならないのだ。この 男は労働者の 。まだ生きていない人生は、 しかかってくるのです。廿二年! 血を流すでしよう。 アイロニー、 フリ 彼の強烈 ものごとの苦 サーシャは 0 ックが生き、サー りから 心に起きた動揺 な本性 廿一 が、 れると、あ Va 皮肉 伐り倒さ 抽出す 才だ。 シャ を押

もしわ な じるのです。 サーシャは、鉄格子に蒼白の顔を押しつけ、まじろぎもしない眼 たしがこのいまわしい りもなかった。あるのはただサーシャだけ 光景をしや断し て、 涙に暮 囚人の衣服をつけ、石の壁を背後に れ、永遠の眠 りに就くことができた でわたしをみつめ、 ら!で

にい の上にかむさる黒雲を引き裂き、わたいいえ、絶対に絶望してはいけない。 だ! わたしの子を救うのだ、あのひとを人生に呼び戻すの わたしは生きるんだ、生きてサーシャ のために戦うんだ。 は わたしの

訳註

業してい 情は、 のでした。わたしがフェー フリック事件前、エマ、フエージャ、サーシャは共同生活を営み、アイスクリー *フエージャについてエマの記録では、画家志望者で、モストのグループにいたとある。 機縁になっている。 米国社会では少数移民グループであるドイツ・イーデッシ系に属したことが親交を深める で中産階級のユダヤ人家族の間に生まれた。一八八八年米国に移住して(エマの移住の一 で立派でした。「ぼくは るようになってからだが、両人ともユダヤ系ロシア人で、 年前)アナー びさま をヘボルシェヴィキの神話― エマと行動を共にした。一九一九年両人はロシアへ追放になり、ベルクマンはその見 シャことアレキサンダー・ベルクマンは一八七〇年、ロシアのリサアニァ(Lithania) し、わたしを違った世界へ導きました。衝突はなく、 た。三者の関係は恋人同志である。エマは言う〈フエージャに対するわ ーシャへの愛に影響しなかった。それぞれがわたしの内部にある異なった感情を キスト運動に従事。 ベルクマンは本文にあるフリック襲撃を企て廿二年の刑を受け、出獄 君の愛する自由を信じて ジャ への愛を、 一九二五年 エマとの出逢いはヨハン・モストのグループに彼女が出 サー ―〉にまとめている。一九三六年病気の為自 42 シャに語ると、 るし〉 ナロードニキの系譜に連らなり 彼の答えは期待以上に寛大 満ちたりたものをもたらす -ム店を開 た

質面で支援した。 シャが入獄後、フエー ジャは画家として世にで、運動を離れたが、絶えずエマを物

舌の才能を見抜き、オペラや演劇に近づけたのは彼である。また本文中に見えるモストと舌の才能を見抜き、オペラや演劇に近づけたのは彼である。また本文中に見えるモストとれる。ウイーンで、 Zukunft (未来) 誌に拠りアナーキズムを宣伝していたが、一八八二のあつれきは、エマに対するモストの愛情の挫折が主軸になっている。モストは一九〇五年二月ルイズ・ミッシェルの死の追悼会でエマと顔を逢わせているが話はしなかったとあの同志に呼ばれ、短い演説をした。

* "自立 " グループである。創設者、プカート (Joseph Peukert) はオーストリアの人と思わ加したグループである。創設者、プカート (Joseph Peukert) はオーストリアの人と思わ加したグループである。創設者、プカート (Joseph Peukert) はオーストリアの人と思われる。ウイーンで、 Zukunft (未来) 誌に拠りアナーキズムを宣伝していたが、一八八二のあつれる。ウイーンで、 Zukunft (未来) 誌に拠りアナーキズムを宣伝していたが、一八八二のあっれる。ウイーンで、 Zukunft (未来) 誌に拠りアナーキズムを宣伝していたが、一八八二のあった。 刊。一八八二年米国に移る。一八八六年へイマーケット事件により全米に運動を展開。モ したが一八七八年英国に流亡中、アナーキズムに転向。一八七九年英国で Freiheit を創 ストは雄弁で、俳優志望だったが幼児期に受けた顔面の傷のため果せなかった。エマに弁 *ヨハン・モスト は製本工の出身、個人的直接行動の主唱者。元ドイツ社会民主党に所属

だったステルマッハが処刑され、ブカートは他の者とオーストリアを脱出した。モストはこ 年のデモの際、弾圧を受けた。ウイーンに戒厳令が敷かれリーダーの一人でモスト 件をプカー トの裏切りとして、米国に於ても『自立』グループを敵視していたようだ。 の弟子

エッセイ